移動する身体と故郷の物語の行方
移動によって見いだされた故郷と移動のなかで変容する故郷

Migrants and Changes in Their Hometown Memories :
A Hometown Remembered by Migrants and Its Changes during Migration

川村清志

KAWAMURA Kiyoshi

はじめに
❶故郷論への視座
❷『同窓会誌しつら』の成立と展開
❸故郷についての語り口
❹玄祖母の旅の記録と皆月への嫁入り
❺曽祖父の遭難と遠隔地への墓参り
❻考察
おわりに

［論文要旨］

本論は，近代日本において生地からの移動によって見いだされた故郷の物語が，現代においてどのように変貌し，実体と言説の境界面においてどのようなゆらぎを抱えているかを検討する。故郷を巡る物語は，様々なメディアのなかに表出され，出郷や離郷，場合によっては故郷喪失の経験をもつ多数の都市生活者の内面に刻み込まれてきた。そのような物語はいくつかの定型を構成しつつ，地方にとどまった者や地域間を往還する者たちにも受容され，変奏されて紡ぎだされていった。

これまで故郷観や故郷の物語についての研究の多くは，都市に住む出郷者たちの社会組織や心性の問題として論じられてきた。しかし，本論では表象される側であった故郷において内在的に，あるいは相互交渉的に語られる故郷の物語に注目する。同時に現代において故郷からの移動の経験を身体化し，故郷と新たな生活の場としての「第二の故郷」との距離をはかりつつ生活する人びとによってどのように再構成されているのかに焦点をあてる。

以上の目的を検証するために石川県輪島市門前町七浦地区にあった七浦小学校の同窓会の会誌を取りあげる。この同窓会は明治の終わりに成立して以来，本部を七浦地区におき，地元の卒業生と出郷者との交流を目的とした会誌を発行してきた。ここでは質量ともに会誌がもっとも充実していた 1980 年代中頃から 90 年代にかけての誌面に登場する記事の検証を行う。近代初期に移動によって生み出された故郷の物語が，世代を超えて続く地域間の往還の経験や，世帯や家格に関係なく生じる離郷経験のなかで，物語そのものの解体，ないしは内破にむかう可能性について考えていく。現実の故郷はひたすら過疎化し，高齢化していくなかで，故郷の物語がどのように語られていくのか，その徴候をこの時期の会誌から読み解いていきたいと考える。

【キーワード】故郷，移動，物語，同郷団体，家郷

はじめに―故郷の発見と「第二の故郷」

人が生まれ育った生活世界から，空間的にも社会的にも全くスケールの異なる場所に投げ出された時，そこに抜き差しならない喪失感や疎外感が生じることは容易に想像できる。日常のなかで人が身体を介して触れ合っていた生活はすべて失われ，不定形で，底知れず，見通しのきかない世界が広がる。この生活世界から引き剥がされた身体における喪失感こそが，懐郷の思い，失われた過去への思慕といった故郷を巡る物語の温床となっていった。

故郷の物語の多くは郷里を離れ，都市を中心とした異郷で生活する出郷者によって／むけて紡ぎだされた。故郷という物語は，主体による移動の経験を通して育まれてきたのである。そのため，多くの場合，故郷を思い起こす主体の背後に，移動による距離感，故郷から隔てられた疎外感が語られ，歌われてきた。もちろん，身体に刻まれた喪失感は故郷を渇望し，哀惜する語り口の裏面に，故郷を否定する語り口をうみだすことにもなる。これらの相反する眼差しは，故郷の物語の様々な局面に埋め込まれていた。

おそらく，前者の側面を強調したものとして，例えば高野辰之の「ふるさと」に代表される文部省唱歌をあげることができる。それらは定型的なイメージゆえの強靭さによって懐郷の思いを喚起し続けてきた。他方で，故郷についての陰影に富んだイメージも，多くの物語や詩句のなかに記されることになる。金沢出身の詩人，室生犀星は，初期の名作「小景異情」のなかで故郷を次のようにうたっている。

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや
うらぶれて異土の乞食《かたゐ》となるとても
帰るところにあるまじや
ひとり都のゆふぐれに
ふるさとおもひ涙ぐむ
そのこころもて
遠きみやこにかへらばや
遠きみやこにかへらばや［室生 1992］

このあまりにも有名な詩句には，近代になって発見された故郷の典型例が示されている。室生犀星は 1910（明治 43）年，21 歳のときに上京した。故郷と東京を行き来する時期が続いたが，大正の初年頃に北原白秋に見いだされ，彼の主宰する雑誌『朱欒』に投稿された「小景異情」の一編が上記の作品である。これらの詩を通して知り合った萩原朔太郎とは後に同人誌も創刊し，新々の叙情詩人として活躍することになる。

最初の 1 行は，主体と故郷との距離感が端的にうたわれる。彼の身体は「都のゆふぐれ」にいな

がら，遠く離れた「ふるさと」を思い起こし，涙ぐんでいる[(1)]。ただこの詩では，「帰るところにあるまじや」という決意が，何に起因するものかは明示されない。それは都会での「立身出世」を志す青年の挟持を示すものなのか，閉鎖的な地方から離郷を余儀なくされた「故郷喪失」の嫌悪感なのかは定かではない。おそらく，その両面を合わせもち，どちらとも読み取ることができるからこそ，この詩はながらく人びとの記憶に残ってきたのだろう。

しかし，室生には，彼の故郷観を示すもう一つの重要な詩がある。1920（大正 9）年の『寂しき都会』に収められた「第二の故郷」の詩である。この詩で室生は，上京した当初，「旅にゐるような気がして仕方がなかつた」と記す。何を見ても，どこを歩いても，自分とは疎遠な世界が広がっていた。しかし，その東京で 5 年 10 年と暮らすうちに，彼の心持ちは大きく変わっていく。

私はたうとう小さい家庭をもち
庭にいろいろなものを植ゑた
故郷の田園の一部を移したやうな気で
朝晩つちにしたしんだ
……
そのうち父を失つた
それから故郷の家が整理された
東京がだんだん私をそのころから
抱きしめてくれた
……
街からかへると
緑で覆はれた郊外の自分のうちの
いきなり門をあけると
みな自分を待つてゐるやうな気がした［室生 1992］

彼は家庭を持ち，庭に馴染みのある植物を植えることで「故郷の田園の一部」がそこに現れたと感じている。父（養父）が亡くなって実家が整理され，故郷との関係が失われる一方で，東京という場所に包まれる心持ちが実感される。旅人の疎外感はうすれ，「みな自分を待つてゐるやうな気」になっていったという。

この詩を書いた頃，室生は『性に目覚める頃』などを発表し，小説家としても自立しつつあった。彼は東京の郊外，田端（当時は北豊島郡滝野川町）に居を構えていたが，この場所には芥川龍之介をはじめ，多くの文士や芸術家が移り住み，後に田端文士村とも言われるようになった。多くの知己に囲まれ家族と暮らす東京は，確かに彼にとって「第二の故郷」となっていったのである。

室生が経験した心境と環境の変化を同時代の世相のなかで的確に捉えていたのは，民俗学の泰斗，柳田国男であった。彼は『明治大正史 世相篇』［柳田 1990a（1931）］――多くの場合，民俗学内部よりも社会学者や思想史の文脈でより生産的な議論が展開されてきた書物であるが――のなかで次のように述べている。

我々が故郷を成長する一つの生体として，愛し見まもることができるようになったのも，実はまた教えられた技術であった。故郷を自分が失うた幸福な過去と，ごっちゃにするような者は論外であるが，現に止まって村とともに活きた人ですらも，これを鏡の影のようにはっきりと知ることはむつかしかったのである。それが今日ではさしたる経験のない者でも，ほぼわが村の形勢を説くことができる。わが村を解するようになったのは他の村を見たからである。隣でないものとも比較することが許された結果である。すなわち故郷意識の変化は，当然に異郷興味の増加に伴のうて現われたのであった［柳田 1990a（1931）163］。

柳田はこれに続けて「この傾向は疑いなく都市の生活者によって導かれたもの」と述べており，村と都市との交渉過程を前提としている。「村の形勢を説く」ことができたのは，「他の村」だけではなく，「都市」を見聞し，経験した存在であることが考慮されていると考えねばならない。そのような「外から教えられた技術」として，故郷へのまなざしは成立していった。しかもそれは，「異郷興味」と一対をなす意識の変化であったと柳田は述べている。このような望郷や懐郷といった都市人のエモーショナルな領域については，後に様々な研究者が注目する望郷歌の研究へとリンクする問題設定である。

「故郷」とは何よりも，自らの出生地と乖離し，都市という他者に囲まれた空間で内省的に捉えられた表象であった。同時に都市で故郷を同じくすることは，実生活における互助的な役割を果たす機能も付与されつつあった。柳田は「以前の田舎暮らしに比べると淋しかった」都市での生活において，「同郷人がことに親しくまた頼もしくも思われた」［柳田 1990a（1931）163］と記している。このような議論は，都市における同郷団体や互助組織に注目した社会学や歴史学の議論へと継承されていくだろう。

ちなみに柳田の『世相篇』の初版の巻頭には「第二の故郷」と記された東京郊外の住宅地の航空写真が掲載されている。ここでは室生と同じように生地を離れ，東京に居を定めた柳田自身の生涯を想起させずにはおかない。彼は自らが「日本一小さい家」［柳田 1989a（1959） 21］と呼んだ兵庫県の福崎郡辻川に生まれた。

後に彼は13歳で長兄の住む茨城県の布川に預けられ，16歳のときにはじめて上京することになる。東京帝国大学を卒業後は農商務省に勤務し，高級官僚としての道を踏みだした。ほどなく大審院判事，柳田直平の養子となり，その四女孝と結婚して一家をなす。その後，官僚を辞して朝日新聞の論説委員を務めたり，国際連盟委任統治委員としてスイスに赴任したりするなどの公私に多忙を極めた。これらの仕事と併行し，民俗学の組織づくりや方法論的な基礎をまとめつつあった昭和初年，彼は53歳で世田谷区の成城（当時は北多摩郡砧村）に居をかまえた。後にその家は「木曜会」の会場ともなり，その書庫は「郷土生活研究所」として研究者たちに開放されることになる。柳田にとっても，東京の郊外とは，まさに「終の棲家」であるとともに「第二の故郷」であったのかもしれない[(2)]。

おそらく，柳田が指摘した再帰的に認識される「故郷」，あるいは他との差異性と均質性を通して語られる故郷イメージの問題は，故郷を考えるうえで重要な視座を提供してくれるだろう。だが，残念ながら柳田の「故郷」への複眼的な考察が，彼の「民俗」への視線と十分に重ね合わされるこ

とはなかった[(3)]。もちろん，その奇妙に屈折し，乖離したまなざしの所在をここで詳説することは本来の目的ではないし，その準備もできていない。ただ言えることは，柳田以後の民俗学もまた，故郷について語ることはほとんどなく，郷土やムラという実体化された存在を研究対象としてきた。その状況は，戦後になってむしろ強化，固着化していき，宮本常一のようなごく一部の例外を除けば，民俗学は故郷という表象はもちろん，それらの物語を抱え持つ出郷者たちの行方に関心を持つこともほとんどなかったのである。

けれども，「故郷」の物語とは乖離したところで進行し，展開してきたはずの日本民俗学の言説が，1980年代のある時期より「故郷」を巡る言説空間の一画を占めることになる。高度経済成長期以後の，民俗事象の激減や過疎化による「伝承母体」の喪失という危機的状況に加えて，都市民俗への関心の陰画として現れる移動や漂泊の経験に関する社会学や文化人類学との関心の共有を通して，日本民俗学は自らの学問対象を「自分が失うた幸福な過去と，ごっちゃにする」ことで，その言説空間の維持をはかろうとしてきた。

1980年代後半以後の民俗学周辺における故郷論の展開には，少なくとも，このような認識論的な転倒の系譜を意識しておく必要があるだろう。ただ室生と柳田において確認しておきたいのは，彼らがともに都市に住まう出郷者たちにとっての「第二の故郷」を見据えていたということである。生地から都市への移動という経験を経て，彼らの多くは，都市部やその近郷に自らの生活拠点を築きあげていった。そのような場所や人のネットワークを，同郷団体としてその社会的機能を評価する視点もあれば，「第二のムラ」としてその閉鎖性や前近代性を批判的に捉える視座もありえる［神島1961］。いずれにせよそれらは，生地からの移動や漂泊を経験した主体が，新たな場所に定住する過程と捉えることができる。

では，この「第二の故郷」を獲得した人びとは，その後，生地である故郷とどのような関係を構築していったのだろうか。都市に再定住した離郷者は，故郷に対してどのような眼差しを注いでいったのだろうか。その問いを，しかし，柳田や室生に発することはできない。高度経済成長期が本格的に到来しようとしていた1962（昭和37）年，彼らは共にその実り多く，波乱に富んだ生涯を閉じることになる。やがて来る不可逆的な社会変動とそこで繰り返された数知れない移動の物語は，我らの時代の課題（フォークロア）である。

❶……故郷論への視座

本論は，移動によって見いだされた故郷についての物語が，現代においてどのように変貌し，実体と言説の境界面においてどのようなゆらぎを抱えているかを検討する。故郷を巡る物語は，歌や詩，小説や芝居，映画やテレビといった様々なメディアのなかに表出され，出郷や離郷，場合によっては故郷喪失の経験をもつ多数の都市生活者の内面に刻み込まれてきた。そのような物語はいくつかの定型を構成しつつ，地方にとどまった者や地域間を往還する者たちにも受容され，変奏されて紡ぎだされていった。

このような故郷観をめぐっては，いくつかの研究方向がみられる。まず，出稼ぎや同郷団体，都市の互助性といったテーマを展開した都市社会学を中心とした研究者による成果があげられる。と

くに故郷を同じくする人びとによって結成された同郷団体については，多くの事例研究が行われてきた。初期の研究では，これらの組織がもつ互助的な機能や社会的経済的な関係の構築過程が注目されていた。また，研究が展開していくなかで，都市への適応過程や生地へのＵターンの問題にも関心が寄せられ，人々が抱く故郷への意識や心情の問題が浮上することになる。その結果，生活史による都市と出生地との往還の再現や，同郷団体が形作るシンボルやイベントを通じて醸成されるアイデンティティの所在が研究対象となっていった［松本 1985，1994，小林 1986，山本 1994，鯵坂 1994，1995，1997］[(4)]。

また，地域と都市の近代化に関心を持つ歴史学者によって，故郷の物語を紡ぎだす集団が記した媒体の検証が行われている［竹永 1985，成田 1998］。たとえば，成田龍一は，「同郷団体」が都市において成立した 1880 年代に着目し，それらの「同郷団体」が都市において発行した会誌の分析を行っている。彼は会誌の詳細な分析を行い，故郷についての本質論的な言説が構成される一方で，それらが多様化，重層化していく過程を明らかにしている。これらの研究は，故郷を近代国民国家のなかに入れ子状に形成された仮構物として捉え，そのフィクショナルな構成過程を時系列上に明らかにしていこうとする。

また，流行歌や文学作品に登場する故郷イメージについての社会心理学的な分析がある。これらの作品を「民衆の心情の反映」と位置づけることで，不特定多数の人々に共有された故郷イメージが，析出可能な対象として主題化されている［見田 1978［1967］］。その後，同様に流行歌から望郷や郷愁といった故郷イメージを検証しようとする試みは，多くの研究者によって継承されていくこととなる［荒木 1983，藤井 1997，2000］。

これらの研究に対して民俗学では，故郷の物語や表象が正面から論じられることはほとんどなかった。故郷という言葉が民俗学者やその周辺で語られるようになったのは，ようやく 1970 年代後半になってからである［坪井 1986，真野 1990，谷川 1978，1988］。近年，「故郷論こそ民俗学の中心課題で」あるべきといった主張もみられたが［岩田 1998，2000］，故郷が，民俗学独自の視点から論じられたとは言いがたい状況に変わりはない。例えば，宮田登は，「流行歌の中の『故郷』観」［宮田 1988］を論じているが，視点そのものは社会心理学のそれを踏襲したものにすぎない。あるいは，松崎憲三が編集した『同郷者集団の民俗学的研究』［松崎編 2002］は，同郷団体についての綿密なデータに基づく重要なケーススタディーズが収集されている。しかし，それらが基本的には都市に在住する出郷者たちの営みや故郷観に着目している面で，既存の社会学的な研究と決定的に異なる視点を打ちだせたとはいいがたい。

ここで問題となるのは宮田や松崎らの研究が，1980 年代の「都市民俗学」の関心の延長線上にあることである。彼らの対象がかつては地方に生まれながらも，都市に住まう人びとに焦点化されるのは仕方がないことかもしれない。しかし，本来，民俗学が調査の対象としてきたのは，ノスタルジーの対象として語られてきた故郷の側だったはずである。それならば故郷の物語を語る主体が，どのように生地から離郷してきたのか，その後，故郷とどのような距離を生みだしてきたのか，それらが交通網やメディアの現代的な展開のなかでどのように客体化されていったのかが問われて然るべきである。

他方で地域社会の側が，自己表象として故郷という言葉を積極的に用いるようになった事例につ

いての議論が，1990年代以後に現れてくる。民俗芸能や昔話，祭りといった故郷を喚起する拠点と，民俗学が収集し，分類し，検証してきた領域が重なるものであることが確認されている［川森1996，2000，八木1994a，1994b，1998，安井1997a，1997b］。これらの議論は文化人類学や社会学の成果も取り入れつつ，故郷を構築主義的に捉えることで，その現代的な展開の可能性を示唆している。ただしこれらの議論では，今度は出郷者たちの視点や声を含めた身体のありようは，ほぼ抜け落ちてしまうことになる。紹介される事例の多くは，観光開発や地域振興の文脈での事例が示されており，故郷表象を受容する側の立場性や受容の過程はほとんど問われていない。

そこでこの小論では，移動の経験によって構成された故郷の物語が，その移動を身体化し，故郷と「第二の故郷」との距離をはかりつつ生活する人びとによってどのように再構成されているのかに焦点をあてる。そして，近代初期に移動によって生み出された故郷の物語が，世代を超えて続く地域間の往還の経験や，世帯や家格に関係なく生じる離郷経験のなかで，物語をある種ループ状に旋回させつつ，物語そのものの解体，ないしは内破にむかう可能性について考えていく。

❷……『同窓会誌しつら』の成立と展開

本稿が考察の対象とする『同窓会誌しつら』は，石川県輪島市門前町七浦（しつら）地区にあった七浦小学校の同窓会によって発行されてきた[5]。門前町は室生犀星の故郷，金沢から100キロほど北上した辺り，ちょうど能登半島が曲折する外浦に面する。金沢から直通列車はなく，内浦の穴水駅から門前町の中心部までバスに乗り，七浦に向かうためにはもう一度バスを乗り継がねばならない。

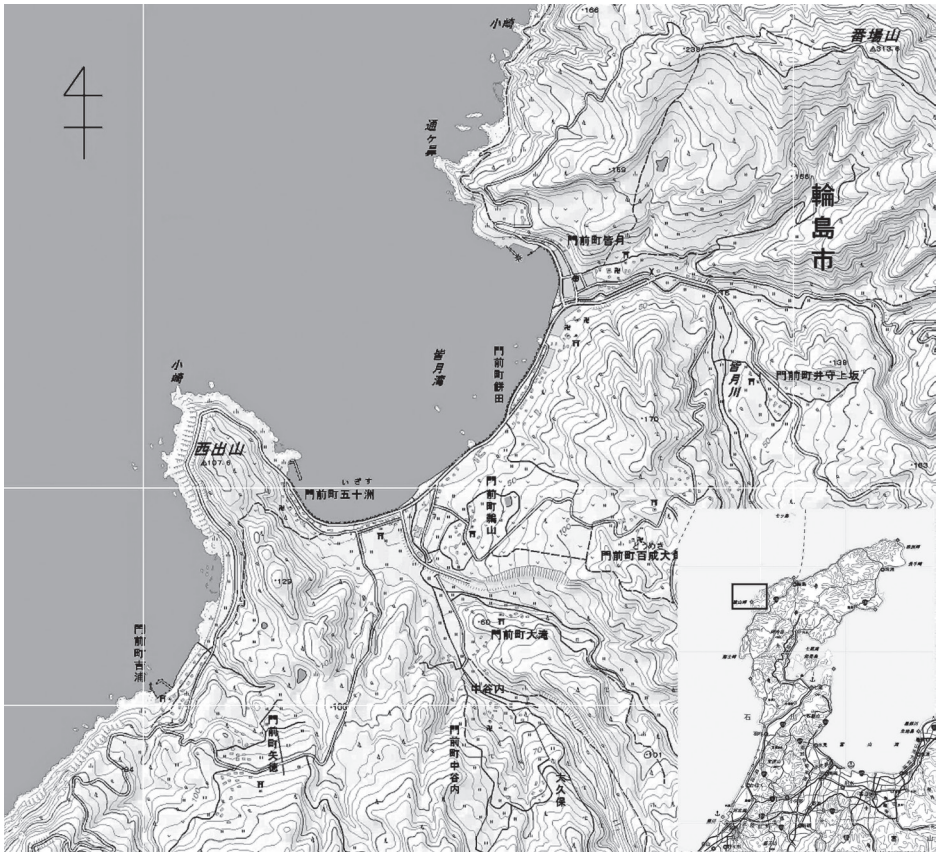

図1　七浦地区海岸部（国土地理院1_25000より作成）

七浦地区は門前町の北西部に位置し，半農半漁村によって構成される（図1参照）。もともと地区は，1889（明治22）年の市町村令にもとづき，鳳至（ふげし）郡七浦村として成立した。戦後の町村合併で門前町に編入されたのは1954（昭和29）年のことである。さらにその門前町も2006年には，平成の大合併を機に輪島市に編入されることに

なった。現在，七浦地区には13の村落が点在するが，これらの村落は海沿いの比較的大きな村落と，山沿いの小規模な村落に大別することができる。前者として最も大きな皆月で百数十軒，五十洲（いぎす）で40軒弱，吉浦は十数軒である。ただし，地域の過疎化と高齢化に歯止めはかからず，独居世帯や実質的に居住していない世帯も年ごとに増えている。

1950年代の後半まで七浦沿岸部の村々では，親方子方制度によるイワシの刺し網漁が盛んに行われていた。これは船を所有する親方が，数件の家を子方として雇い，沿岸部で漁をするというものであった。漁期は4〜6月で，ちょうどイワシの産卵期と重なっていた。しかし，潮流の変化や大型船の進出にともなう漁獲高の激減のため，漁の運営が困難になる。全ての親方の家が船を手放したのは1960年代の中頃であった。その後，多くの者が海外航路の船乗りとして村を後にすることが多かった。旧門前町全体では船会社に務める者が800人を超えており，家の長男，次男や家格の区別はほとんどなかったようである。また，このような人の流れは，決して新しいものではなく，戦前はもちろん近世の頃から左官や大工，あるいは北前船の船乗りなどで，地域外に働きに出る者は数多くいたようである。

七浦地区にはじめて小学校が設置されたのは，1874（明治7）年の学制試行の年にさかのぼる。その後，七浦地区内に複数の学校が存在した時期が続いたが，1894（明治27）年には七浦村立の七浦尋常小学校に統合された。それから約10年後の1904（明治37）年には，同窓会の設立が検討されることになる。七浦地区の歴史や地理を記す『七浦村志』には，その経緯についてかなり詳細に記録されている。当時，七浦小学校校長であった長岡守政吉が，この年の8月8日，高等科卒業生を母校に集め，同窓会設立の趣旨を提唱した。来会者は卒業生44名のうち18名と半数にみたなかったが，彼らの同意を得た校長は，「曾員は同窓の厚情を温め，知識の交換をなし，及び校下の利益昂進を計る」ことを目的とした「七浦小学校同窓会」の成立を決定する［七浦小学校同窓会編 1968（1920）103］。1914（大正3）年になると，同窓会員のなかに出郷者が多く，総会への参加が困難であることが問題となる。そこで，「曾誌を發刊して以て相互の消息を詳かにせんと唱ふる」［七浦小学校同窓会編 1968（1920）104］声が役員会でも話題となり，二度の総会を経てようやく会誌発刊が可決となり，11月の「天皇即位大典の佳節」に合わせて第1回の出版へとこぎつけたのである（写真1参照）。

七浦小学校の同窓会誌は，創刊時には『同窓会誌』という名称で，金沢の印刷所から132部が発行された。この『同窓会誌』という名称は第2次大戦をはさんで，33号まで継続されるが，1969（昭和44）年の34号からは，『同窓会誌しつら』（以下『しつら』と記す）という，現在の名称で刊行されることになる。基本的には年刊で発行されてきた会誌だが，年2回の発行が行われる一方で，10年近くの休刊が続くこともあった。(6)

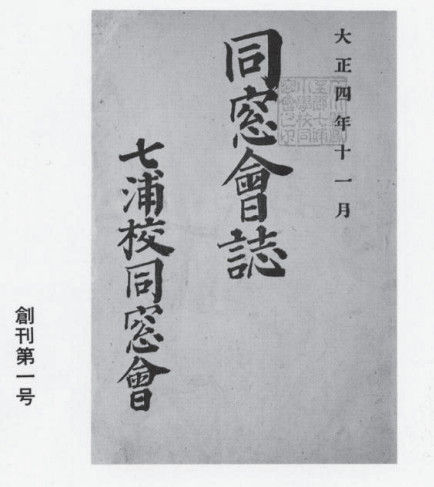

写真1　『同窓会誌』創刊号

図2は会誌のページ数の動態を示したものであ

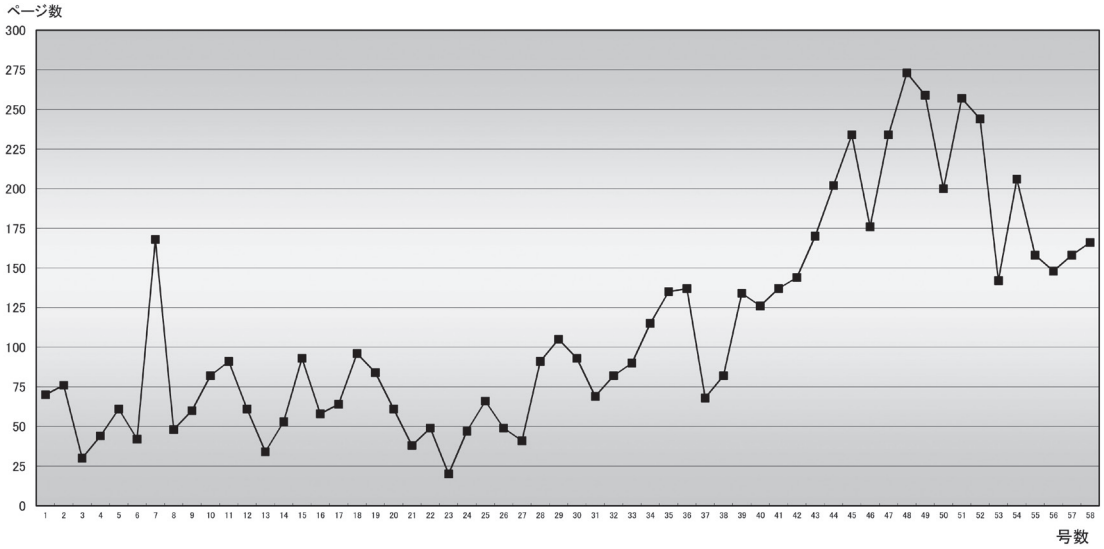

図 2　同窓会誌ページ数動態

る。戦前の発行となる初号から 23 号までの平均ページ数は約 66 ページで，名称を『しつら』に変更するまで（1 号～33 号）の約 67 ページと大差ない。ページ数が極端に増加している 7 号（168 ページ）は，学校創立 50 周年を記念した特集号であり，また，戦後の混乱期に謄写版で出された 23 号（1952 年）は，20 ページと極端に少ない。

一方，名称を改めて以後 34 号から 52 号までの平均ページ数は，約 172 ページとなっており，また，（カラー）写真がふんだんに使われるなどの特徴もある。とりわけ，40 号から 52 号にかけては，多い時には 250 ページを超えることもあった。発行部数は約 800 部で，1 部 2000 円で会員に配布されている。

さらに会誌の終盤となる 53 号から 58 号までは，そのサイズが A5 から B5 版に変更され，紙面の文字も大きく，行間も広げられた。会員の平均年齢が高齢化したため，読みやすさを優先した構成になっている。また，この間の平均ページ数は 163 ページだが，200 ページを超えた号は一度しかなく，ページ数は徐々に減少していった。そして，ついに 2006（平成 18）年の 58 号をもって同窓会の会誌は休刊をむかえる。すでに地元では，児童数の減少に伴って 2002（平成 14）年に七浦中学校が廃校となり，同窓会の母体であった七浦小学校も，2006（平成 18）年をもって門前東小学校に統合されていった。現実社会における過疎化や高齢化は，故郷の物語の基盤となる組織や媒体さえ，瓦解させていったのである。

❸……故郷についての語り口

会誌の内容と形式についてみていきたい。当初，誌面の中心は，会員による評論や紀行文，文芸活動が主をなしていた。とりわけ，初号から 22 号までの戦前期に評論を掲載している者の多くは，名誉会員（ある時期までは賛助会員）に列せられる地元の有力者や真宗の僧侶，そして，学校教員である。地域のオピニオンリーダーである彼らの議論は，道徳的な内容や教育的な主張が多数を占めている。

その一方で，地域から出郷して関東や関西，場合によっては朝鮮や台湾，樺太といった「外地」へ赴任した人々からの便りやエッセーも増加していった。ただ，執筆者にも一定の傾向があり，毎

回のように執筆者に名を連ねる者がいる一方で，一度も投稿したことがない同窓会生もかなりの数にのぼる。そこでは，故郷の物語の圏内にいる者とその埒外にいる人々の存在が浮き彫りになる。

戦後になっても誌面の項目や様式は，戦前とそれほど変わりはない。項目名は変わったり細分化されたりするが，評論，エッセー，文芸活動（詩，短歌，俳句，紀行文），便りなどが掲載されつづける。それらは，地域に関する思い出や個人的な近況を記したものから，七浦地区の振興策やその批判を記す文章もみられる。ただし形式面で特徴的な企画として戦後の会誌には，「座談会」という形式が誌面を賑わせるようになる[(7)]。この「座談会」には，七浦地区の振興策，過疎化への対応などについて，老若男女を問わずに参加した人々の声が記されている。また，これは編集者の趣味的な側面もあるが，40号を超えたあたりからは，多くのカラー写真が紙面を飾っていった。それらは「グラビア」というコーナーに集約され，村祭り，民謡を中心としたイベント，小中学校の活動の様子，地元在住の老人のポートレートなどが掲載されている。

また戦後の会誌では，地元の人々よりも出郷者からの便りや文章の頻度が高くなっているという側面も指摘できる。高度経済成長期以後になると関東や関西で同窓会の支部が結成され，各々の活動や学年ごとの同窓会の様子も頻繁に報告されている。

以上のような流れを踏まえたうえで故郷についての語り口を捉えなおすとき，気をつけておかないといけない点がある。同郷団体の会誌である以上，そこに故郷の物語が語られていると考えるのは少し早計である。戦前におけるこの会誌の分析によると，この時期の会誌において故郷がテーマになることは，あまり多いとは言えない[川村2003]。その要因の一つは，この時期の寄稿者の多くが，都市に移動した出郷者ではなく，むしろ，故郷に残った人びとによって構成されていたことにある。会誌の初期，出郷者たちの多くは，自らの立場や意識を表出することは多くなかったのである。

しかし，数少ない故郷についての語り口のなかにも出郷と移動の記憶は刻印されている。その一つが会誌の第3号に登場する西美雄の「懐郷」である。彼は後に能登に帰郷し，『同窓会誌』の最も頻度の高い執筆者となっていった。彼の二度目の寄稿となるこの短文は当時の帝都東京から発信されたものである。

> 櫻花爛漫，霞の如き上野の山に，一人悄然とし[(ママ)]して立てる少年あり。遠く〳〵無限の市街を淋しげに見やりなりき。夕陽方に落んとして赤く雲をそめ，切間を漏るゝ金箭は悲しげな少年の顔，美しき櫻の花を等しく射れり
>
> ピーと長く，餘音を引いて汽笛の響きし時は，日ははや没して棚引く雲は，黄に，紅に，紫に，藍に，墨に，次第次第にいろとられゆきぬ。されど少年は尚遠く微な地平線をみつめてありき。轟々と汽罐の音をとゞろかしつ，一列の汽車は毒々しき黒煙を吐きながら哀れな少年を見向きもせずに走りゆきぬ。・・・・空は唯黒ずみて涼しき夕風の，花にさゝやきてすぐるのみ，少年の心は汽車より早く越路をすぎて能州の空に来たれども，身はこゝ上野の山にありて動かざりき［3 11[(8)]］。

西は都会の夕暮れのなかで，汽笛の音や「毒々しき黒煙」から，故郷を偲んでいる。「少年の心は汽車より早く越路をすぎて能州の空に来たれども，身はこゝ上野の山にありて動かざりき」とい

う記述は，身体レベルでの距離感を見事に言い表している。あるいは西の脳裏には，上野の停車場に「ふるさとのなまり」を尋ね歩いていた石川啄木の姿も浮かんでいたのかもしれない[(9)]。むしろ，そのような文学的な修辞が，自らの身体によって追体験されていることも，故郷を考えるうえでは重要な契機となりうる。この事例から確認できるように，故郷の物語は移動の経験，それも都市への移動の経験によってもたらされたといえる。

やがて，故郷への思いを記す文章は，戦後になってからの『しつら』の誌面に氾濫するようになる。故郷の物語は積極的に語られるだけでなく，語られる内容や意味づけも多様化していった。さらに地元の側からも，出郷者に対する地元の表象として故郷という言葉や，故郷を想起させる景観や行事を積極的に紹介するようになっていく。先に記した座談会でも「座談会…―良き哉“ふるさと”（ふるさと談義）」（43 号），「“ふるさとの創造”―今，三十代に何が出来るか―」（44 号），「サァやるまいかい！―魅力あるふるさとづくり」（47 号）など，「ふるさと」を標榜するタイトルが毎号のように掲載されている。また，カラー写真で紹介された行事や風景は，戦後，在郷者たちが故郷の自己表象として繰り返し提示していくものにほかならない。

この同窓会誌を注目するべき理由についていくつか示しておきたい。まず，この雑誌が何度かの休刊期間があるものの，大正から平成までの継続的な語りを集約する場であったということである。つまり，大正期から今日までの故郷観の変遷がここに記されているわけである。ただし本論では，会誌の事例を時系列にもとづいて網羅的に分析するわけではないので，この特質と意義についてはここでは触れない。

もう一つの特質は，この会誌が都市に住まう出郷者ではなく，故郷の側が中心となって発信してきたものであることである。既存の研究が主な対象としてきた都市に住まう離郷者や出郷者が，自らの半生と出生地を省みることで想起される故郷の物語とは異質なものであったといえる。ただし，ここに離郷者からの心情が吐露されていないわけではない。すでにみたように人びとが自らの移動の経験を踏まえて内在化していった懐郷やノスタルジーは，この会誌のなかにも刻印されていた。

さらに戦後の会誌をみるときに，もう一つの特質がある。それは会誌が長期にわたって継続し，故郷についての物語の振幅を複数の声として集積していることと密接に関連している。座談会のような直接的な場と紙面上での往還の両面で，離郷者と地元との対話や交渉の軌跡が示されていた。ここで構成されている故郷の物語は，出郷者と在郷者が，お互いの立場を探り合い，対象化し，交渉を行っていく過程で表出されていったものなのである。

次節で紹介するテクストは，まさにこれらの過程を内在化していったものと捉えられる。これらのテクストは，離郷を経験している主体が，その生家の親族との関わりについて記したものである。検証する二つのテクストのうち，前者は 1984（昭和 59）年の 44 号に，後者は 1990（平成 2）年の 49 号にそれぞれ掲載されている（写真 2 参照）。この時期の『しつら』はページ数が 200 ページを超える号も多く，重要なエッセーや座談会などが誌面を飾っている。出郷者と在郷者との交流や対話が繰り返され，高度経済成長期以後の人びとの生活や，故郷との距離にも変容が生じていたことを読み取ることができる。このような誌面の展開を視野に入れる時，以下で紹介するテクストは，移動の経験と故郷の物語を考えるためのきわめて示唆的なテクストなのである。

これらのテクストには三重の移動の経験が刻印されている。まず，著者の多くが離郷や出郷とい

う移動を経験した主体であるという点である。次にとりわけ後者の事例では，エッセーの主題となるエピソードに関わった著者たちの移動が記されている。さらにこれらのテクストには，著者たちの先祖にあたる人びとの移動の経験が記されている。折り重なった移動によって想起される物語は，故郷の物語の現代的な変容を示しているようにみえる。あるいは，そのような物語が一つの臨界に達し，その内側から解体していく徴候ともみてとれる。巨視的には 1980 年代の半ばから 1990 年代の初頭にかけて，日本全体がバブル経済にわきたち，地域社会の空洞化が決定的になりゆく時期である。その意味でもこれらのテクストは，一つの時代の転換を示しているのではないだろうか。(10)

写真 2　『同窓会誌しつら』44，49 号

❹……玄祖母の旅の記録と皆月への嫁入り

まず，会誌 44 号に掲載された「玄祖母の旅――親鸞と二十四輩の跡を尋ねて」［44 133-137］から紹介していく。これは皆月の左伝家出身で，当時は大阪に在住していた大野豊次によって記された彼の玄祖母の物語である。玄祖母は約 200 年前に富山県の砺波郡在房（ありふさ）から皆月に嫁いできた。彼女が結婚前に訪れた浄土真宗に所縁のある各地の古刹や名跡の旅の記録が，このエッセーの前半に記されていく。

七浦を含めた能登一帯は浄土真宗の寺院が多く，ほとんどの家は真宗寺院の檀家となっている。ここで示されている「二十四輩」は宗祖親鸞の 24 人の高弟をさし，彼らが開基したとされる古刹が二十四輩寺院である。その多くは関東地方に点在し，多くの真宗門徒の巡拝コースとして整備されていった。ただし後世の寺院の移転や再建，教派の分流などによって，100 以上もの寺院が二十四輩を呼称するようになっている。

大野は「これほどまでの一寒村へ馬か篭しかなかった二百年前の昔に，隣県富山砺波郡から，私の玄祖母が嫁いで来られた奇縁を強調したく，そして，その信心が私の生涯に大きく幸いしたのではとの思いにかられたのが，冒頭の一節です」［44 134］と記している。

この近世にさかのぼる未婚女性の一大独り旅は，大野の兄の左伝豊一が実家の土蔵から見いだした古文書を判読することによって明らかにされた。具体的には以下のような史料が見いだされたという。

1. 往来手形（玄祖母携行，寛政 3 年 5 月付，越中砺波郡在房専徳寺発行）
2. 巡拝計画書と巡拝社寺の書記への依頼文

3. 巡拝した各社寺の集印帳
4. 往来手形（玄祖母携行，加賀中納言の住人証）

大野はこれらの史料の情報をもとに砺波郡在房の専徳寺に便りを送るが，残念ながら玄祖母の実家を定かにするには至らなかった。では，この旅とは一体どのようなものだったのだろうか。

巡拝計画書と集印帳によると，この旅は2年間にわたって行われた。1年目は1792（寛政4）年の年始から始まり，その年の9月18日まで続けられた。初年度の旅程は218日間にわたっている。実家を出発した彼女は，金沢に向かいそこから西国に下っていく。福井，滋賀，大坂へと足をのばし，兵庫の姫路御坊の本徳寺を参詣した後，ここから東へ折り返し，関ヶ原，名古屋，岡崎，豊田，飯田，甲府と東海信越を移動していく。実は，西国の旅程に京都市内が抜けていることが疑問として浮上するのだが，その点については後に大野の推論が加えられている。甲府を越えた彼女は，大月を経て関東地方に入り，厚木，小田原，三浦，横須賀，東京を経て，茨城県猿島郡境町の妙安寺までがこの年の最終到達地であった。

翌年の1793（寛政5）年には，実家から東国にむかい，昨年の最終地からさらに東北方面へと歩を進める。宇都宮市から二十四輩ゆかりの仏閣22カ所，福島市，仙台市，盛岡市本誓寺，奥羽山脈を越えて秋田県仙北郡六郷町（真光寺，善証寺）をまわり，ここから日本海側を南に下り，新発田，新潟，直江津を巡り，10月10日に実家に戻るという行程であった。2年目の旅の期間は，前年より少し長く228日である。

巡拝した社寺旧跡は167カ所にのぼり，2年間の旅程をあわせると446日，移動した距離は約2500㎞におよぶ。ただしこの一大旅行の理由については，定かなことは分かっていない。大野も「玄祖母も，両親とか自身のための何かの祈願であったのか，あるいは，それを表向きの理由として諸国見物であったのかもしれません」［44 135］と語るのみである。

しかし，このエッセーの後半は，家族の系譜につらなるロマンスへと展開する。この玄祖母と皆月の出身の玄祖父との出会いに関わる物語である。この物語には様々なリソースからの再構成が行われている。

まず，玄祖父は「若くして優れた宮大工」であったとされる。それを示す傍証として，実家の古文書のなかには「南北十九間二尺，東西二十二間四尺の御影堂と記入した平面図も」［44 135］見いだされていた。ここから大野は，玄祖父が京都の本願寺の復旧に携わっていたと類推する。そして，彼は玄祖母が玄祖父と出会った場所こそ，この京都だったと考える。すでに述べたように彼女が残した記録には，富山県内と京都市内の寺跡が全く見当たらない。この資料の欠如から「玄祖母は往来手形を手にした年に，地元のゆかりのある二十二ヶ寺と京都の参詣を終えていた」と捉えている。京都には本願寺をはじめとして宗祖である親鸞ゆかりの旧跡が集中しており，地元の次にそこに参詣していたと仮定したわけである。そして，この「京都参詣の折には，奇しき縁によって，玄祖父との出会いとなったはずです」［44 135］と大野の推論は続けられる。

この玄祖父については，家族・親族間の伝承が語られる。すなわち，「わが家の言い伝えでは，玄祖父は大変な美声の持ち主であった」［44 135］という。そこから次のような二人の出会いの光景が想定される。

本願寺での工事中とか上棟式などでは，玄祖父が美声を張りあげて木遣り音頭を取っていたことでしょう。この音頭を聞いていた参詣人のなかに玄祖母もおられた。これが二人を近づけるきっかけとなり，熱心な仏の教えについて語り合うこととなり，そして二世を誓うこととなる［44 136］。

こうして二人の結婚は，「寛政六年」頃とされるが，それらについては「記録もなく，言い伝えも聞かず」という。大旅行の後，ほどなく彼女は皆月に嫁いだことになる。しかし，玄祖母の両親はこの結婚に賛成ではなかったようである。一度だけ馬で皆月にくることがあったが，その際に嫁入り道具として持たせた「すずしのかな」を「辺鄙な所には似合わないと持ち去った」という。これは「生のまゆから取った生糸で織ったもので，折り畳めば一握りの大きさになる」［44 136］とされ，貴重で高価なものだったようである。ただこの経緯についての出典が資料なのか伝承なのかは判然としない。

いずれにせよ，このような経緯から玄祖母たちは，生みの親への「償う心も加わって神仏信心に一層励んだようです」と捉えられる。こうして左伝家では神仏への感謝をおろそかにせず，世代を超えて信心を続けてきた。「御先祖の信仰と功徳の余慶が，百五十年後に生まれた私の生涯にも大きな加護となっていると堅く信じる」［44 136］という思いが綴られることになる。

この信心深い玄祖母を想起させるモノの存在も紹介されている。左伝家には「玄祖母が巡拝の途次肌身離さず携行した木彫りの阿弥陀如来像」が安置されていた。高さは8㎝，幅は4.5㎝の小さな仏像で，旅の途上の守り本尊と考えられている。この如来像は，1888（明治21）年の高潮にさらわれたものの，数日後に家近くの浜に漂着していたところを発見され，再び安置されることになった。現在も「仏壇の中に家宝として納められています」ということである（写真3）。

写真3　皆月川南の風景
（現在は道路が舗装されているがかつては砂浜が広がっていた）

確認しておくと，このエッセーでは異なった媒体や資料が駆使され，自らの生家の系譜が再構成されていることがわかる。すなわち，旅程に関する資料としての文書資料があり，玄祖母が携行していた阿弥陀如来というモノ資料がある。さらにそれらを補うように美声の持ち主であった玄祖父や阿弥陀如来についての口頭伝承が付帯して語られている。これらの語りは，一面では間違いなく故郷のミニマムな拠点としての家についての物語に他ならない。(11)

❺……曽祖父の遭難と遠隔地への墓参り

もう一つの事例は，1990年発行の49号に掲載された三つのエッセーに記されている。これらのエッセーには，地元出身で北前船の船乗りが旅先で亡くなった顛末が明らかになり，曽孫たちがそ

の墓前を訪れたことが記されている。

発端は，青森県の郷土史家から地元の寺院の墓碑についての問い合わせがあったことからはじまる。その墓碑には次のような文言が刻まれていた。

（正面）南無阿弥陀仏
（右）　慶応四年辰年四月朔日　釈証海
（左）　能州吉浦　俗名佐平次

写真 4　吉浦の風景

ほどなくこの「能州吉浦」の「佐平次」が，七浦の吉浦集落の浜高家の先祖にあたる人物であることが判明する（写真 4）。彼は約 120 年前，青森の野辺地港で時化にあい，船を守るために遭難したことも確かめられた。こうして，浜高家にゆかりの 6 人姉妹とその親族が，曽祖父の墓参りに向かった顛末が，『しつら』に掲載されることになったのである。その三つのエッセーが，中本富子「船頭佐平次の遭難」［49 37-42］，重田秋子「うちのおじじが父親」［49 43-44］，鴻森貞子「墓参の旅」」［49 45-49］にあたる。これらは，同じ旅の思い出や共通の曽祖父についての記憶でありながら，微妙に異なるニュアンスやリソースをもとに記述している点でも興味深いテクストである。これらのテクストもまた，家族や親族の連続性や系譜が故郷表象として描かれている事例である。

最初の中本富子「船頭佐平次の遭難」は，曽祖父以前の家族の系譜についても言及している。彼女は，浜高の家の親族にあたる中本家の養女になり，婿養子をもらった立場にある。この中本家は，2 代前に佐平次の息子にあたる嘉太郎が婿養子に入った家であった。嘉太郎に子供がいなかったため，彼女が養女に入ったのである。中本によると佐平次以前の家系図は見当たらないが，伝承によるとかつては佐円寺という真言宗の寺院であったと記されている。当時の家に関する随想は，吉浦という集落全体についての歴史に広がる。

・・・・昔，吉浦に漁が利いて利いて，長次郎さの家の格子窓に吊してある薦（こも）を引く紐の先には金の玉が付けてあったという位，村人たちは豊かだったそうですが，その後ぱったり漁が利かなくなり，そんな年が何年も続き，皆夜逃げ同様に越後（今の新潟）へ移って行った時，おババさまと言う人が細々と佐平次を継いでいてくれたそうです。

その後おババさまの命日が十日で，私が中本へ来た頃迄『御先祖様の日だ』と言って精進していました。その後はどんな経過で三人の娘がいたかは知りませんが，みよ，わか，今一人は名前が分かりません。わかは五十洲の吉田善仁与門さんへ，名前の分からない方が同じく佐々木喜次郎さんへ嫁いだそうです。とすれば，青森で亡くなった佐平次はお婿さんと言うことになりますが，おじじの言うには，皆月の橋詰十右衛門から来たとのことでした［49 38］。

ここで記されている内容は，中本の実家のおジジである吉三郎（佐平次の息子）から姉が聞いた伝承とされる。佐平次（浜高家）の家系の背景として，吉浦がかつて漁で栄えていたこと，その後の不漁続きで多くの者が新潟の方に逃散していったこと，そのようななかで家を守っていた「おババ様」という人がおり，その娘みよの婿養子として佐平次が，皆月から来たらしきことが記されている。この後，中本は，自身が佐平次の息子で吉三郎の弟にあたる嘉太郎が婿に入った半兵衛の家に養女に入った経緯とそこで聞き知った話を記している。

私が半兵衛にきておババに聞いた話ですが，佐平次が青森の港で陸に上がっている間に夜中から大時化になり，一番沖の方に停泊している自分の船に戻ろうとして，責任上人々の止めるのも聞かず，海へ飛び込んだが，もう少しと言う所で力尽きたとのこと［49 43］。

佐平次の伝承は，本文にあるように「半兵衛にきておババ」から聞いた話とされる。戸籍上は孫にあたる中本が，佐平次の義理の娘から聞いた話としてこのような語りが記されている。自分の姑であり親族でもあった人から，彼女は共通の先祖である曽祖父にして義理の祖父の話を聞いたことになる。佐平次は北前船の船頭として青森を訪れていた際に船が時化に襲われた。沖に停泊していた自分の船を守るために海に飛び込むが，あとわずかのところで力尽きたという。「引き上げられた体は一晩中，女の方が肌で温めてくれたそうですが，とうとう還らなかった」［49 43］とも語られている。

次に重田秋子「うちのおじじが父親」では，「母か姉から聞いた話」として次のような語りが記されている。

うちのおじじの親，つまりわたしたちの曾祖父が青森のどこかの港で，自分が陸へ上がってお酒を飲んでたら急に海がしけて来たげと。

それでおじじの親の人は自分の乗ってた舟を守るために港へ走ったげと。

また，そのおじじの親の人の乗ってた舟は港の一番沖に錨をおろしてだげな。

おじじの親の人はおよいで，次の舟，次の舟とわたり，もう危ないからと人のとめるのも聞かず，しけてる海を泳いでとうとう命を落としましたげと。」［49 43］

方言を交えた表現力豊かな記述である。ただし語られている内容は，中本が記した伝承とほぼ変わるところはない。彼女はこの話を聞かされた時，「とても責任感と勇気のあるえらい人」［49 43］が先祖にいたことを子供心に誇らしく感じたと書いている。

この重田の記述が興味深いのは，「おじじの親」から「おじじ」，そして「父」へと自分たちに連なる家系に記述がスライドしてくことである。そもそも，曽祖父が亡くなった時に祖父は10歳位であった。その後13歳で親の後を継いで北前船に乗り込んだという。「きっと大人の人に怒られながら，またいたわられながらくるくると，こまねずみのように働いたんでしょう」［49 43］と想像している。

彼女の記憶のなかの祖父は，「とてもしっかり者で，家では絶対的存在」であった。祖父に怒ら

れるから悪いことはできないと語られる一方で，「とてもやさしく，炉ばたでいろんな昔話を語ってくれ」る存在でもあった［49 43］。ここでの昔話は，口承文芸の昔話というよりも祖父自身の経験や教訓などをふくむ幅広い語りであったようである。また，祖父が70歳くらいのころの記憶として，息子であり重田らの父の佐吉と協力して「炭，薪，竹を運んでいたこと」や，鰯場に船を出している父を案じて,「あそこに家の船がいると言って」［49 43］眺めていた様子などを記している。その父は，「とてもとてもやさしくて，金石からきれいなリボンのついた帽子や，レースの縁飾りのついた日和傘を買ってきてくれ」［49 43］る存在であった。また病身の妻をいたわり，夜中に背中をさすっている姿を，彼女は記憶している。

こうして曽祖父からの家の系譜が再配列されることになる。すなわち，「勇敢で責任の強い人であったであろう曾祖父」がおり，「しっかり者で信仰心のあったおじじ」へ，さらには「やさしくて人と争うことの大嫌いな父」［49 44］へと連なるファミリーツリーがここに描かれているわけである。

同様の家族の記憶は，鴻森貞子「墓参の旅」によって，別の角度から記されている。彼女の記述は先の二人とは異なり，今回の墓参りの旅程を中心に書き進められる。

> 吉浦の姉や中本の妹は曽祖父の話は聞いた事があり知っていたそうですが，二人以外の姉妹は今度始めて知りおどろきました。吉浦の姉に電話で聞いた処，ずっと昔，祖父に「南部に父親の墓があるからついでがあったら，参ってくんせいよ！」と言われた事があったとか。其の頃は姉もまだ若かったし「なんちゅうおかしな事を言うおぢぢやろ？そんなナンブにどま，ついでがある訳もないのに……」。其の後第二次大戦，そして昭和十九年十二月，あの悲惨な機雷爆発で義兄を失い，幼い三人の子供をかかえて夢中で実家を守り，又妹や私にとっては母代りでもあった姉。此の度宮沢様がおいで下さったのも祖父の願いと曽祖父の故郷思慕の念が通じたんではないでしょうか［49 45］。

彼女は，曽祖父についての伝承は聞かされていなかったという。そのうえで改めて思い起こされるのは，戦時中の機雷事故によって親族を失ったあと，母代わりとして自分たちの面倒を見てくれた長姉の苦労である。この姉に伝承を伝えた祖父の存在，その祖父によって墓所の存在が示された曽祖父へと語りは遡行していくわけである。

彼女の旅の記録の特徴は，自分たちよりも下の世代の親族との交流が丁寧に記されていることである。

一行が旅に出たのは1989（平成元）年6月16日のことである。東北への玄関口，東京上野駅に佐平次の親族が集った。

> ・・・待合わせ場所で和歌山から上京の浜口の姉や市川の姉と再会，三人で五番ホームへ。金沢発の白山二号が着くのを待つ間に千葉県我孫子市在住の美枝子ちゃん（中本の妹の長女）が娘の尚美ちゃん（高一）を連れて現れる，時間通りに列車到着劔地在住重田の姉，吉浦中本の妹と共に下りて来た実家の姉「二人に連れて来てもろーたわいの！」と，昔は姉妹中で一番大きく体格も良かった姉がなんと小柄になって，大好きだった皆月の伯母さまそっくりの顔に

なって。揃って予約しておいた駅前旅館に入る。

久しぶりの再会を喜び合う。曽祖父もきっと好んで飲んだであろう石舟の水と故郷の花を妹が大事に吉浦から持って来てくれました［49 45-46］。

この記述からもわかるように，この浜高家の七人姉妹のうち，実家を継いだ姉以外に近隣に嫁いだのは，吉浦と五十洲と劔地の三人である。この劔地は旧門前町の諸岡地区に位置し，吉浦からは車で 40 分～ 50 分ほどかかる場所にある。彼女ら以外は，関西や関東に出て新たな家を築いていることがわかる。各々の家の子孫たち，鴻森にとっては甥や姪にあたる世代も，新たな家と家族をもち，各々の「第二の故郷」で生活している様子をうかがうことができる

この後，彼女たちの一行は，上野駅前の宿で一泊し，翌日，東北新幹線で青森に向かうことになる。野辺地に着くと郷土史研究会の出迎えをうけ，会員である宮沢の自宅に招かれたり，町立の資料館の案内を受けたりしている。

翌日には，曽祖父が眠る西光寺に赴き，親族が一同に会して墓参りを果たす。墓前で彼女は，「長い年月遠い異郷の地で肉親の訪れをどれ程待っていたことか」［49 47］と曽祖父を偲んでいた。中本が地元から持ってきた水と花が供えられ，親族一同が手を合わした。故郷の水や花といった具体的なモノがここで用いられ，特別な意味が込められていることに注意しておきたい。このようなモノや声を介した直接的な経験こそが，故郷の物語の身体化にほかならないからである。ただその一方で，「佐平次の墓に気持丈(ママ)でも一緒に眠らせて上げたい」という思いから，「お墓の周りの土を少し頂いて帰る」［49 48］ことにしたとも記されている。ここでは逆に墓の土というリソースが，曽祖父の「依り代」として青森から能登へと持ち帰られている。

ここで改めてクローズアップされるのは，この旅の端緒が，郷土史家による歴史資料の発掘だったことである。つまり，郷土史家というメディアが，遠く隔てられた二つの地域を切り結び，過去の事件の記憶を当事者たちに送り届ける役割を果たしたことになる。すでに述べたように一行は野辺地町立民俗資料館を訪れ，郷土研究会代表の長峰文男による解説を受けている。そこでは先史時代の展示なども見せられたが，「やはり目を引いたのは廻船の航路や関連した用具類」であったと，曽祖父が乗っていた北前船に関連のある資料に注目している。また，宮沢の自宅では，野辺地の夏祭りなどのビデオを見せてもらってもいる。このビデオ映像という現代的なリソースを通して，野辺地と七浦が比較されていることにも注目しておきたい。

夏祭りのビデオを見せて頂きましたが，八月十八日から二十日迄の三日間開催される祭りは，野辺地港が昔，商港として栄えた頃，上方文化が船で直接渡って来た名残とかで，豪華絢爛な山車と優雅な旋律の祇園ばやし。又中日には御神輿を先頭に各町の町印神楽等が随行して海上渡御が行われ壮観なお祭り風景。ビデオから流れる音声が心地よくひびき躍動が伝わって来るよう。山車曳きの音頭が皆月祭りの木遣りの音頭にそっくりだと吉浦の姉や中本の妹が話しており，宮沢様も黒島のヤッチョイ節が此方の盆踊り唄によく似ているし，やはり北前船の影響を受けてるようですねと話しておられました［49 46］。

ここでは，野辺地のビデオを通して祭りや芸能が鑑賞されている。勇壮な野辺地の祭りは，「上方文化が船で直接渡って来た名残」と説明される。具体的に示されるのは，「豪華絢爛な山車と優雅な旋律の祇園ばやし」や神輿の海上渡御などである。近世における都市文化，北前船がもたらした先進的な上方文化との連続性についての語りをここで確認することができる。しかし，能登からきた一行は，それに加えて自分たちの地域との比較，野辺地と門前を比較する視点を育んでいる。祭りの山曳きの音頭について姉妹たちは，「皆月祭りの木遣りの音頭にそっくり」だと語り合っていた。[(12)] 郷土史家の語りからも，野辺地の盆踊り唄が「黒島のヤッチョイ節」に似ているとも記されている。この黒島は，七浦地区と同じ門前町に属し，江戸時代は天領として栄えた村である。北前船の寄港地でもあり，大坂の堺から移された2台の曳山がでる夏祭りでも知られている。様々なメディアによって示されたリソースは，遠く隔たった地域の交流の歴史を，臨場感をもって経験することを可能にしている。こうして，佐平次の家の歴史は吉浦の歴史から，さらには能登，青森を切り結ぶ海の交流史へと接続されていったわけである。

❻……考察―伝承による故郷の構築と変容する物語

限られた事例ではあるが，故郷についての物語が1980年代以後に変容していく徴候ともいえるテクストを紹介してきた。断っておくがこれらの事例は，実体としての故郷の否定ではないし，故郷についての物語を批判するものでもない。故郷の否定という素振りや語り口は，故郷の物語のなかではありふれた言説である。むしろ重要な点は，親族や先祖の系譜から故郷を捉え直すというここでの事例が，身体レベルでの故郷の物語を再構築している一方で，故郷の可塑性や流動性を明るみにしていることである。

確かに二つの事例は，歴史学や社会学では十分に吟味し得ない家郷への眼差しのあり方を考えるうえでも示唆に富むものでもある。そこでは特定の家や親族レベルでの歴史の再構成が行われている。しかも家の歴史を記すリソースの一つには，民俗学が関心を注いできた口頭伝承[(13)]が含まれる。

「玄祖母の旅」では，玄祖父が「大変な美声の持ち主」であったと伝えられていた。また玄祖母の両親が結婚に反対だった傍証とされた「すずしのかな」のエピソードも，おそらく伝承によるものだろう。仏壇に安置されていた小さな仏像も「旅の途上の守り本尊」という伝承によって，家の系譜を示す重要なリソース足りえた。そのような200年をへて語られる家の伝承が，結果として故郷の物語の重要な側面を形成していたのである。

「佐平次の遭難」では，より詳細に伝承の系譜が示されている。その経路の一つは，祖父から子や孫への語りの系譜である。重田は，母か姉から聞いた話として曽祖父の遭難について聞かされていた。また，中本や鴻森は，長姉が祖父から曽祖父の墓参りに行くように求められたエピソードを今回の墓参りに際して反芻している。もう一つの経路は，家の伝承の重層性を考えるうえで興味深い。中本は，この曽祖父の遭難の話を養子先の「半兵衛」の家で聞いたと記していることである。すでに記したように半兵衛の当主は，佐平次の子供にあたる人物であった。両家は親戚同士であり，共通の祖先についての語りが実家ではなく養子先で聞かされたわけである。

さらに興味深いのは，彼女の語りに佐平次以前の系譜が記されていた点である。そこで吉浦とい

う集落がかつて漁で栄えたものの，やがて不漁が続き，多くの者が村を離れて新潟方面に移住していたという故事も語られている。もっとも鴻森のエッセーからは，「二人以外の姉妹は今度始めて知りおどろか」されたと記しているため，このような家伝が常に伝えられるわけではないことも明らかになっている。故郷の物語の拠点が重層的な親族間のつながりのなかで，口承によって継承されていたことには注意が必要である。さらに言えばこのような複数の回路から伝承が語られることで，家の語りは村や地域の語りとリンクし，故郷の物語へと連なっていくことが理解できる。

故郷の物語が，家や親族レベルの伝承と再リンクを果たしていることを確認できただけでも，故郷論における民俗学的な視座の重要性を主張することは可能だろう。口頭による伝承が，個人の歴史を家や親族と関連づけ，さらに村や地域の歴史ともリンクしていく過程をここに見て取ることが可能だからである。それはまた，民俗的な歴史が現代の人々の生活や価値観に合わせて呼び起こされる能動的な側面として捉えることもできる。

しかし，歴史を構成するためのリソースは伝承だけではない。蔵に眠っていた文書や寺に残る過去帳などの文字史料，墓石や仏像のような物質資料なども，家の歴史の再構成に動員される。大野が左伝家の玄祖母の旅の軌跡が綿密に再現しえたのは，往来手形や巡拝計画書，巡拝した各社寺の集印帳が見いだされたからであった。「佐平次の遭難」では，郷土史家が見いだした墓碑の文言が重要な役割を果たした。その簡潔な文面は，七浦に残る過去帳と照らし合わされることで，青森と能登半島を結びつけ，今回の旅を実現させる端緒となりえたのである。ここでも墓というモノと過去帳などの文献，そして浜高家の伝承が再構成されることで，曾祖父に連なる家の歴史が再構成されている。

質的に異なるリソースやメディアを駆使しながら，地域の歴史が再構成されていることに，民俗学は最大限の注意を払うべきである。なぜなら，このような歴史の再構成にこそ，民俗学や文化人類学が探求してきた「内在的な歴史」の今日的な展開があり，地域の人びとにとっての歴史観の存立基盤が問い直されているからである。

それらは，かつてのように「目に一丁字なき」人びとが語り伝えてきた口承を中心とした歴史ではない。民俗学がその存在の有効性を主張する際に，名もなき一般の人びとが自らの声を通して語り伝えてきた記憶を呼び起こすという学問的立場があった。口承による歴史は，権力者や支配者が書き記した文字による歴史の補完である以上に，もう一つ別の歴史の創造でさえありえた。しかし，今日，口承というメディアを文字の歴史に対置させる図式を取る必要はないし，そのような戦略はフィールドの現実をみていない研究者の幻想にすぎない。(14)

現在の地域社会において展開してきた彼らの歴史とは，ここでの事例が示しているように，口承以外にも文字やモノなど様々なリソースを用いて再構成されていくものにほかならない。むしろ，注目すべきなのは，このような歴史の再構成でいかなるリソースが用いられ，それらはどのような歴史や価値観（信念）とリンクしていくのかという問題である。「佐平次の遭難」の事例が示唆するように，郷土史家による歴史資料の発見や資料館での見聞も，地域や家，あるいは個人の歴史と切り結ばれていくだろう。

ただしこのように新たに更新される「歴史」は，これまで記してきた動態の直中にある故郷の姿を浮き彫りにもしていく。冒頭に記したように近代における故郷の物語は，主体の身体レベルでの

移動の経験によって構成され，肉づけされてきた。ということは故郷とは，本来，移動に対する定住，あるいは漂泊に対する定住の象徴であったはずである。さらにその故郷の物語のなかでも家や親族は，山や海といった自然景観とともに，もっとも安定的な故郷の拠点として語られてきた。[15] しかし，これまで紹介した事例で語られているのは，自分の3代，ないしは4代前の先祖にさかのぼった時には，調和的で閉鎖的な故郷の空間を彼らが飛び越えてしまうという歴史的な事実である。推論や想像力にとんだ文体は用いられつつも，基本的には資料や伝承を通して明らかになった過去が，客体化されて記述されている。

ある空間や場所に安定的に存在していたはずの故郷，あるいは家郷は，実際には人の移動と人の出会いによって生じた結節点として再構成されている。それはもちろん，否定的な語り口ではない。例えば，大野においては，富山からやってきた玄祖母と皆月出身の玄祖父が育み，自らの人生につらなるものとしての真宗への「信心」があった。彼は自らの生と先祖の「信心」を再リンクすることで，故郷との関係性を再編しているとも言える。また，佐平次の曾孫たちのエッセーでも，そこで表出されるのは先祖から子孫へのつながりの重要性と，親族の系譜の重層的な辿り方である。しかしながら，このような重層性のなかで語られていた曽祖父や祖父も，日本海を超えて移動し続けて生活してきたのである。さらにそれ以前に彼らが生活していた村＝故郷は，不漁のために逃散する家も多かったと語られる。

自らが移動を経験し，都市やその近郊に「第二の故郷」を見いだした語り手たちは，暗黙のうちに自分たちの人生における移動と先祖の移動の経験を重ねあわせ，実体としての故郷との距離を測りなおしている。こうして故郷の物語に定型化されていたディアスポラや喪失の語り口は徐々に退潮していく。自らの経験を踏まえながら，往還可能な移動の結節点としての故郷が，ノスタルジーに満ちた故郷の物語に上書きされながら，描きだされている。

おわりに―故郷の行方

本稿が考察の対象として『しつら』は，❷でふれたように21世紀に入り，休刊を余儀なくされた。現実の故郷はひたすら過疎化し，高齢化していく。交通の便は良くなっているものの，そこにあえて帰る者たちの数は限られている。本論は，現在に至る時代の岐路を示す事例を，4半世紀前のバブル期の記述にみてきたわけである。実は「佐平次の遭難」が掲載された49号には，短いながらも，とても意味深長なエッセーが記されている。

「コーヒー談義」と記されたその文章は，いくつかの項に分かれており，最初の二つは，文字通り，筆者にとってのコーヒーの嗜好と蘊蓄が語られている。しかし，3番目の「故郷はむらさき色」では，著者の故郷への複雑な思いが，さりげなく描かれることになる。「某年，某日，初夏」に筆者は，皆月の村はずれの丘の上に建っていた「ロッジ・能登皆月」に宿泊している。「予定していた帰省の用件もかたづき俗世間のすべてからとき放たれ」［49 13］て，のんびりとコーヒーを口に運んでいる。眼前に広がる故郷の風景が四十数年前とほとんど違わないことを確認しつつ，彼は自らの半生を回想する。

あの時，何も知らずに誰からも真実を聞くこともなく，この海岸から虚妄の世界に旅立ったのは，まもなく日本の虚構が崩れ時代が大きな転換点を迎えようとしている昭和十八年の晩夏であったが，あれから四十数年の時間と空間を置いた今，故郷は紫色である。

明るい色も暗い色も暖色も寒色もないまぜにしたこの一種あやしい色は啄木や犀星もうたった故郷の色である［49 14］。

筆者が故郷をあとにしたのは，まだ戦時中の 1943 年（昭和 18）年，国民学校を卒業して間もなくのことである。それは，後の彼にとっては「日本の虚構が崩れ時代が大きな転換点を迎えよう」していた時期と記される。虚構のあとにやってきた敗戦，そして戦後の生活については語られず，「四十数年の時間と空間」を経た初夏の空のもとに紫に染められた風景が見いだされる。その色は，「明るい色も暗い色も暖色も寒色もないまぜにした」故郷の色だと筆者は語る。

彼はこれに続けて室生のあの「小景異情」の詩を引用しつつ，そこに故郷との訣別の表明と「断ちがたい憶い」が併記されていることを指摘し，それを「否定の否定」と捉える。この「故郷に対する「否定の否定」の心」は,「故郷を離れて生きる人々の無意識の底に沈潜する故郷賛歌」の「ひそやかにして強烈な屈折した表現に他ならない」［49 14］と記されている。

しかし，この折り重なる二重の否定は，決して強い肯定にはなりえない。それは，むしろ，本論が紹介した事例が示す解体の徴候に通底するものを予感させる。そもそもこの筆者はなぜ，故郷に戻りながら，わざわざロッジで宿泊していたのだろうか。彼が「とき放たれ」たと記す「帰省の用件」とは，一体，どのような内容を指していたのだろうか。それが，紫色に包まれた故郷のなかにある限り，我々には明らかにしようのないことである。しかし，出郷者が感じる「否定の否定」の思いは，時には，もはや永遠に戻り得ない何かへのはかない希求なのかもしれない。

故郷の物語には，いくつもの亀裂，深い断層が走っている。自らの身体による移動の経験から創り出された故郷の物語は，その移動自体の可逆性によってかつてのような孤独感や疎外感とは結びつきにくくなった。もはや，都市に住まう人びとは移動の経験と対置するようなものとして故郷を意識しなくなりつつある。故郷に住まう人たちも自らの家や地域の系譜自体が，移動のなかのある局面に過ぎないことを経験的に理解している。

こうして移動の陰画として産まれた故郷の物語は，移動の反復と常態化による認識の変化によって，その内実を失っていったと言える。近代のある地点から七浦に芽生え，日本各地へと広がっていった人のつながりが，どのように繁茂し，枝分かれし，やがて空洞化していったのか。会誌の終焉への道程とともに，改めて見つめ直していきたい。

註

（1）――本文にも記した通りこの時期，室生はまだ，東京と金沢を行き来していた時期であった。そのため，この詩が創られたのが金沢であったのか，東京であったのかについての議論も存在する。また，ここでの「みやこ」が金沢か東京かという議論も行われたようである。しかし，本論では，まさにこの詩が東京での不安定な生活の時期に書かれたことを重視し，そこで見いだされた「ふるさと」との距離感を前提として議論を進めている。

（2）――『世相篇』の初版が『明治大正史』第 4 巻として朝日新聞社より発刊されたのが，1931 年の 1 月であり，

彼が成城に移ったのは1927年の8月である。この書で説かれている「風景の成長」のための活動に，柳田は「第二の故郷」で積極的に関わっていたようである。これらの試みのいくつかは,『豆の葉と太陽』に所収された「美しき村」などにみることができる［1989b］。ちなみに彼は身のまわりの風景に関して「我々は旅人である」［柳田 1989b 416］と記している。それは悠久の自然に対してつかの間の生を過ごすにすぎない人間についての比喩的な表現であるが，その眼差しは本論が検証する移動の直中にある故郷にも通じるものである。

（3）――柳田自身は明らかに「故郷」という言葉をかなり意図的に用いている。戦後，神戸新聞の依頼によって書かれた『故郷七十年』やそれに類する種々の自らの身辺について記したエッセーはもちろん，本文中にも述べた『明治大正史 世相篇』［柳田 1990a］や『資料としての伝説』［柳田 1989c］においても，故郷という言葉は多く見出される。さらには「家閉談」［柳田 1990c］などの族制語彙を扱った論考，伝説や昔話についての紹介本においても故郷という語彙は用いられる。それは彼が学問的対象であり，基礎とした「郷土」の位相からは微妙に，しかし，歴然と分節化された領域であったと考えられる。これらの術語の文脈を系譜的に辿っていくとき，柳田における戦略的な使用の可能性を改めて検証できるかもしれない。

（4）――なお，都市の同郷団体の研究の系譜については，『都市移住の社会学』巻末の伊藤敏安論文［1994］や松崎憲三編の『同郷者集団の民俗学的研究』［2002］を参照されたい。

（5）――本論が紹介する「七浦小学校同窓会」は，旧七浦小学校の卒業生であることが加入の資格要件である。義務教育が実施された戦後においては，七浦地区（旧七浦村）で子ども時代を過ごしたすべての者とほぼ同義になる。よって，主に村や町といった自治体を単位とした出生地を軸心とする人びとのつながり［松本 1994］という一般的な同郷団体の位置づけからも逸脱しないと考える。

（6）――年2回の発行は，計5回行われている。すなわち，1922（大正11）年の4，5号，1925年（大正14）年の7，8号，1930（昭和5）年の11，12号，1962年の31，32号，1967年の34，35号である。一方，長期にわたって休刊した時期としては，1917（大正6）年から1921（大正10）年と第2次大戦前後の1941年から1951年の10年間である。前者は,『七浦村志』編纂に人材を投入した結果であり，後者は，人材と資材の両面で発刊が不可能であったためであると説明されている。

（7）――これらの座談会のうち，出郷者たちが集って故郷について討論した特集から，彼らの故郷観の多様性について論じたことがある［川村 2000］。

（8）――同窓会誌『しつら』からの引用については，号数とページ数で示している。各号の発行年度については巻末の表2を参照のこと。

（9）――1906（明治39）年に出版された石川啄木の『一握の砂』に収められた歌には，近代日本の故郷イメージの範型が数多く示されている。「ふるさとの 訛なつかし停車場の 人ごみの中に そを聴きにゆく」もまた，そのようなポピュラーな故郷イメージの典型であるが，果たしてこの作品を西が読んでいたかどうかは定かではない。

(10)――この時期には，当時の竹下内閣のもとで「ふるさと創成」が叫ばれ，過疎化の進む地域に1億円がばらかまれることもあった。宗教学者の山折哲雄は，地方が大企業による開発や国策としての地域活性の名のもとに蹂躙され続ける状況のなかで,「故郷よ，怒れ」と悲痛だが，空疎な叫びを放っている［山折 1988］。その他の民俗学者の一部も，調査地の変貌がもはやとりかえしのつかない状況にあることを悟っていたのかもしれない。しかし，現実に起きていた故郷の変貌をただ傍観し,『調査研究ハンドブック』に記された項目調査に追随し，そこに生きる人たちの生活を見守る努力を欠いた民俗学には，いずれにせよ未来などなかったのである。

(11)――以上のエッセーで二つの点を捕捉しておかねばならない。一つは，この玄祖母に連なる系譜が「信心」というキーワードによって，彼のライフヒストリーと結びつけられている点である。もう一つは，この主題が，浄土真宗というネットワークを背景としていることである。このような信仰の共同体のなかにあればこそ，地域を越えた主体間のアインデンティティが語られる側面も考慮に入れておかねばならないだろう。すなわち，地域を越えた往還のダイナミズムを保証するネットワークが，時間と空間の両面にわたって存在していたのである。

(12)――ちなみに皆月で行われる山王祭のケヤリは，伊勢音頭の形式として報告書では示されている［石川県教育委員会編 1981］。また地元では，これは北海道のニシン場に出稼ぎに行った者が，持ち帰ったものだと語られている。確かに函館にある姥神神社の夏祭りで歌われるケヤリとも共通点が多く，野辺地とも系譜上のつながりは否定できない。

(13)――本論では「伝承」という術語を，基本的にはこの口頭伝承の略語として，あるいは文字などを介しない

身体的な記憶に依拠した内容をさすものとして使用している。しかし,「創造を含んだ個人と社会とを不断に編みあげていく行為」［小池 2002 61］と捉えるならば，本論で検証を行ったテクスト全体を「伝承」とみなすこともできるだろう。ただ私自身は，ハビトゥス論や実践共同体論まで組みこんで，この概念の再構築をはかる必然性は現時点では感じていない。

(14)――民俗文化において文字が果たした役割については，近年，積極的に論じられつつある［川島 1995，小池 1996　久野 2009］。「民俗書誌学」という視座を提示した小池淳一は,「民俗と文字文化とは少なくとも日本においては対立したり，全く別個に存在したのではなく，互いに影響を与えあい，融合して成長してきた」と明言している［小池 2011 11］。民俗文化のなかでの文字を重視する視点は，他の研究者にも共有されており，その視点は印刷媒体や図像表現などにも広げられつつある。

(15)――確かにこのような拠点が失われるものとして描かれることもある。とりわけ，高度経済成長期以後の日本の故郷については，主体にとっての主観的な故郷の喪失ではなく，客体化された故郷自体の喪失の物語が常套化していった。山河の荒廃した姿，一家の離散や場合によって村全体の廃村といった社会状況の変化によって，故郷は消失することもあるし,そのような故郷の喪失は，故郷を巡る物語の重要なバリアントの一つである。

参考文献

鯵坂 学　1994「都市住民と故郷との関連――広島市広陽ニュータウンの調査より」『社会文化研究（広島大学総合科学部紀要）』20，1-45
1995「都市同郷団体の現状――東北地方を中心として」『社会文化研究（広島大学総合科学部紀要）』21，129-162
1997「都市同郷団体の現状――甲信越地方出身者を対象として」『評論・社会科学』56，1-28。
石川県教育委員会編　1981『石川県の民謡』石川県教育委員会
伊藤敏安　1994「文献解題――同郷団体研究の系譜」『都市移住の社会学』松本通晴，丸木惠祐編，世界思想社，225-238
岩田重則　1998「故郷観の行方」『民俗の思想』宮田登編，朝倉書店，164-174
2000「過疎・廃墟・故郷」『故郷の喪失と再生』成田龍一他，175-225，青弓社
神島二郎　1961『近代日本の精神構造』岩波書店。
川島秀一　1995「語り伝えと書き伝え――「歌津敵討ち」をめぐって――」『口承文芸研究』18，16-32
川村清志　1996「『ふるさとの伝承』にみる表象の限界――映像化された「伝承」と映像化されない「現実」」『比較日本文化研究』3，66-92
2000「故郷を紡ぎだす「同郷団体」――七浦小学校同窓会を事例として」『講座人間と環境 8　近所つきあいの風景』福井勝義編，234-259，昭和堂
2003「故郷と都市――『同窓会誌』にみる 1910 年代から 1930 年代における故郷表象の変容」『人文学報』89，97-126
川森博司　1996「ふるさとイメージを巡る実践――岩手県遠野の事例から」『岩波講座・文化人類学　思想化される周辺世界』12 巻，岩波書店
2000『日本昔話の構造と語り手』大阪大学出版会
倉石忠彦　1989「『ふるさと』の変貌」『国立歴史民俗博物館研究報告』24
小池淳一　1996「民俗書誌論」須藤健一編『フィールドワークを歩く―― 文科系研究者の知識と経験』嵯峨野書院
2002「伝承」『新しい民俗学へ―野の学問のためのレッスン 26』小松和彦，関一敏編，せりか書房，52-62
2011『陰陽道の歴史民俗学的研究』角川学芸出版
小林多寿子　1986「都市のなかの「ふるさと」――京阪神芝会の一日」『年報人間科学』7：18-35
七浦小学校同窓会編　1968（1920）『七浦村志』七浦小学校同窓会
真野俊和　1990「「ふるさと」と民俗学」『国立歴史民俗博物館研究報告』27，303-327
竹永光男　1985「県人会，郷土雑誌考――近代地域史研究の課題に寄せて」『山陰地域研究』1：1-18
谷川健一　1978「『ふるさと』という妖怪」『伝統と現代――総特集＝現代ふるさと考』55，15-24
1988「新ふるさと論序説」『春秋生活学』3，18-26。
坪井洋文　1986「故郷の精神誌」『日本民俗文化大系一二現代と民俗――伝統の変容と再生』谷川健一編，小学館，

267-308
成田龍一　1998『「故郷」という物語――都市空間の歴史学』吉川弘文館。
久野俊彦　2009『絵解きと縁起のフォークロア』森話社
松崎憲三編　2002『同郷者集団の民俗学的研究』岩田書院
松本通晴　1985「都市における同郷団体」『社会学評論』36(1)，35-47。
1994「都市移住と結節」『都市移住の社会学』松本通晴，丸木惠祐編，世界思想社，1-28
見田宗助　1978［1967］『近代日本の心情の歴史―流行歌の社会心理史』講談社
宮本常一　1984『民俗のふるさと　宮本常一作品全集三〇』未來社
宮田登　1988「流行歌の中の『故郷』観」『春秋生活学』3，130-137
室生犀星　1992『室生犀星詩集―室生犀星自選』岩波書店
八木康幸　1994a「ふるさとの太鼓――長崎県における郷土芸能の創出と地域文化のゆくえ――」『人文地理』46(6)，23-45
1994b「町おこしと民俗学――民俗再帰的状況とフォークロリズム」御影史学会編『御影史学研究会創立二五周年記念論集・民俗の歴史的世界』，岩田書店，481-502
1998「祭りと踊りの地域文化」宮田登編『現代民俗学の視点三――民俗の思想』朝倉書店
安井眞奈美　1997a「「ふるさと」研究の分析視角」『日本民俗学』209，66-88。
1997b「町づくり・村おこしとふるさと物語」『祭りとイベント』小松和彦編，小学館，201-226
柳田国男　1989a『故郷七十年』兵庫新聞社
1989b「豆の葉と太陽」」『柳田国男全集』2，345-563
1989c「資料としての伝説」『柳田国男全集』4，筑摩書房，255-385
1990a「明治大正史 世相篇」『柳田国男全集』26，筑摩書房，7-358
1990b「先祖の話」『柳田国男全集』13，筑摩書房，9-209
1990c「家閉談」『柳田国男全集』12，筑摩書房，273-463
山折哲雄　1988「「ふるさと」よ，怒れ」『春秋生活学』3，36-433，36-43（のちに「日本人のふるさと観」として『仏教民俗学』講談社に所収）。
山本正和　1994「都市の同郷人関係と同郷団体」『都市移住の社会学』松本通晴，丸木惠祐編，pp103-135，世界思想社

表 1　『同窓会誌しつら』名称，発行年一覧

発行年	名　称	号数
1915	『同窓会誌』	1
1916	『同窓会誌』	2
1917	『同窓会誌』	3
1922a	『同窓会誌』	4
1922b	『同窓会誌』	5
1923	『同窓会誌』	6
1925a	『同窓会誌』	7
1925b	『同窓会誌』	8
1927	『同窓会誌』	9
1928	『同窓会誌』	10
1929	『同窓会誌』	11
1930a	『同窓会誌』	12
1930b	『同窓会誌』	13
1931	『同窓会誌』	14
1932	『同窓会誌』	15
1934	『同窓会誌』	16
1935	『同窓会誌』	17
1936	『同窓会誌』	18
1937	『同窓会誌』	19
1938	『同窓会誌』	20
1939	『同窓会誌』	21
1941	『同窓会誌』	22
1951	『同窓会誌』	23
1952	『同窓会誌』	24
1954	『同窓会誌』	25
1955	『同窓会誌』	26
1956	『同窓会誌』	27
1958	『同窓会誌』	28
1959	『同窓会誌』	29

発行年	名　称	号数
1960	『同窓会誌』	30
1962a	『同窓会誌』	31
1962b	『同窓会誌』	32
1964	『同窓会誌』	33
1967a	『同窓会誌しつら』	34
1967b	『同窓会誌しつら』	35
1970	『同窓会誌しつら』	36
1971	『同窓会誌しつら』	37
1972	『同窓会誌しつら』	38
1975	『同窓会誌しつら』	39
1976	『同窓会誌しつら』	40
1978	『同窓会誌しつら』	41
1981	『同窓会誌しつら』	42
1982	『同窓会誌しつら』	43
1984	『同窓会誌しつら』	44
1985	『同窓会誌しつら』	45
1986	『同窓会誌しつら』	46
1988	『同窓会誌しつら』	47
1989	『同窓会誌しつら』	48
1990	『同窓会誌しつら』	49
1991	『同窓会誌しつら』	50
1994	『同窓会誌しつら』	51
1996	『同窓会誌しつら』	52
1998	『同窓会誌しつら』	53
1999	『同窓会誌しつら』	54
2001	『同窓会誌しつら』	55
2003	『同窓会誌しつら』	56
2005	『同窓会誌しつら』	57
2006	『同窓会誌しつら』	58

（国立歴史民俗博物館研究部）

（2014 年 9 月 29 日受付，2015 年 1 月 26 日審査終了）

Migrants and Changes in Their Hometown Memories : A Hometown Remembered by Migrants and Its Changes during Migration

KAWAMURA Kiyoshi

This paper analyzes how the hometown memories of emigrants who left their homes in modern Japan have changed in the present times and what differences exist between the memories and reality. Hometown memories have been expressed by various media and imprinted in the minds of many urban residents who left or lost their homes. While evolving into different forms, these memories have also been accepted and adapted by people who continued to live in their hometowns and who migrated between regions.

Most prior studies on people's perceptions and memories of their hometowns focused on the social organizations and views of urban residents who emigrated from their homes; this paper is centered on how the people who continue to live in their hometowns create hometown memories by themselves or in interaction with emigrants. At the same time, this paper embodies the experience of emigration in the present times to analyze how people who are living in new places while keeping the balance between their original and second homes remember their hometowns.

This paper examines some bulletins published by the alumni association of Shitsura Elementary School in Shitsura District, Monzen-machi, Wajima City, Ishikawa Prefecture, to analyze the above-mentioned points. Since its establishment at the end of the Meiji Period, the alumni association has placed its headquarters in Shitsura District and issued bulletins to facilitate communication between local alumni and those who emigrated from the district. This paper examines the articles of the alumni bulletins at their peak in quality and quantity, from the mid-1980s to the 1990s. The results are used to analyze the possibility that hometown memories created by migrants in the early modern times will be broken or imploded by the experience of migration between regions over generations or the experience of emigration that occurs regardless of the family rank or household they were born into. This paper analyzes the bulletins published when the population of the district was declining and aging to reveal how hometown memories changed in parallel with the process.

Key words: hometown, migration, memory, compatriot association, a place of origin